

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 19 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381220

研究課題名(和文) 現代日本の生命論を軸とした美術教育の展開 自然観を構築させる6段階と文化的領域

研究課題名(英文) A Development in Art Education focused on Contemporary Japanese Life Theory- 6 stage and Cultural Domain for Construction of a View of Nature-

研究代表者

磯部 錦司 (Isobe, Kinji)

椋山女学園大学・教育学部・教授

研究者番号：40322614

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：1980年代以降の現代日本の生命哲学に見られる生命論と、芸術文化のエコロジーの思潮から、自然観を基軸にした美術教育を構想しようとする研究である。自然環境との関係に見られる造形芸術の内容を、環境との一体化、個の想像的世界のリアリティー化、環境の芸術化、生活の芸術化、社会的リアリティー化、社会的創造活動の芸術化の6ステージから検討し、生命をコアとした美術教育の表現内容を位置つけた。

研究成果の概要(英文)：This paper is on the series of the studies which tries to design art education based on view of nature. It regards life as a concept of the times, and the scheme is from the life theory in philosophy of life after 1980's contemporary Japan and current idea of ecology in art culture. In the previous study, contents of figurative art seen in relation with natural environment were considered from the six stages: "become one with environment", "realize individual imaginative world", "make environment art", "make life art", "realize socially", "make social creative activity art". The author considers direct, comprehensive, integrated, and imaginative function of art as a way to form view of nature. We use the six stages as hypothesis in this article, and indicate the content of art education. The education contains life as the core, and it is based on the case analyses. We examine the contents of expression in the six stages from the specific practice.

研究分野：美術教育

キーワード：美術 造形芸術 自然 生命 図画工作 造形表現 自然環境

1. 研究開始当初の背景

「持続可能な開発のための教育の国際的動向に関する調査研究」(佐藤真久, 2009年)によると, ESDにおいては, グローバルな視点とともにローカルな視点, 及び行動・実践につながる学びが重視され, 文化との関連や人間の内面的な側面をどのように位置づけるかが課題となっている。それは, 外界の自然や生命や人間への見方や感じ方, 考え方を深めるといふ美術教育のねらいとも精通する。外界に対する内面の深まりを育むところにおいて今日の美術教育の役割は大きい。筆者においては, 1992年より, 自然観を主題に, 実践の位置づけとカリキュラム開発の構築に取り組み, 2001年以降, 地域に文化的な拠点を築きながら, 日本・オセアニア・ヨーロッパでの実践協力においてその展開と方向を示してきた。美術教育学と自然観との関わりでは, 「自然観の変容を生み出す造形活動」(2005)において, 美術教育がもたらす教育効果について示し, 2009年以降, 教育内容の意味づけを試みた。

2. 研究の目的

ESD(持続発展教育)の研究が世界的に進む中, その展開は今日の課題となっている。本研究は, その最も中心的な課題となる内発的な生命観・自然観の構築を主題に, 美術教育の展開と方向を示す。国内と, ヨーロッパ, オセアニアにおける学校教育の連携から収集した実践記録及び研究実践において, 臨床的に造形活動の機能を明らかにし, その活動のプロセスにある生命観・自然観の変容を示し, 日本文化的, ポストモダンの生命観・自然観をコアとした美術教育について, 6つの段階から構想し, 文化的領域の形成とその実践内容を意味づける。

3. 研究の方法

これまでの拙論と先行文献から生命論を基軸とした美術教育を構想し, まず, 実践事例の活動のプロセスを臨床的に分析し, 自然観の変容を生み出す造形行為の機能について明らかにする。

次に, 実践事例の活動の事前と事後の表現内容の比較調査から, 造形活動をとおしてあらわれる自然観の変容を示し, 内容を分類する。

そして, 国内と海外において協力を得た実践事例と収集した実践資料の分析から, その造形活動を6つの段階に分類し, カリキュラムを再構想する。

そしてさらに, その6段階の実践の展開を分析し, 文化的領域の形成について課題を検討し, 自然観の構築を基軸とした美術教育の展開と方向を示す。

4. 研究成果

(1)生命主義的自然観を基軸とした美術教育の構想

生命主義的自然観とその背景

ここで扱う生命主義とは, 包括的, 統合的なものでありながら, 関係的な作用からその見方や感じ方を広げ深めようとするものであり, 一連の全研究で述べている「生命主義的自然観」とはその考えに立った造語である。

その自然観は, 生命体の全て, 人間の生活や生命活動の全てとのつながりを対象に, 生命を中心にした環境との関係に生まれる見方や感じ方である。この基となる理論は, 1980年以降の現代日本の生命哲学の生命論と, デューイの経験的自然主義である。ポストモダンの日本における生命主義は, 文化論を基盤にもち, 生命を中心にした包括的, 統合的なものでありながら, 相互的, 連続的, 円環的, 状況的なところに環境との関係を見ようとするものがある。近代主義, 機械主義への批判としてポストモダンの時代を背景に生まれているが, その特徴は自然との一体化やつながりの中に関係をみるだけでなく, 日本文化論的な要素といのち観を中心とした生活との関係からその見方や感じ方が捉えられている。

そして, 本稿が基軸とする生命主義的自然観を芸術活動として教育において展開していくために包括性や統合性といった質的な要素と, 関係を重視する自然主義とを融合させる論理が必要となる。その考えを支えるものとして, デューイの自然主義の考えに注目した。

生命主義的自然観を具体化する芸術の内容

1980年代以降の現代日本生命論が自然観と関わる造形芸術の中でどのように捉えられてきたのかを考察した。

まず, 有機体全ての関連性の中で環境との関わりを見ようとする自然概念の変容が, 芸術文化のエコロジーとしての方向を示そうとしている。また, 20世紀後半以降の近代主義への批判を伴う現代美術の動向は, 生活世界との同一化や社会的な創造活動として一つの展開を見せてきた。特に, 20世紀後半以後の日本の現代美術において, 環境との関係性や行為性, 身体性にみる展開は同時代の生命哲学と共通した与件を見ることができ。そのような質と関係の融合はその生命論と共通する。

さらに, 現代社会と対峙する現代美術の動向に目を向けてみると, 社会的なリアリティーやクリティカルな表現へとその芸術は展開する。例えば, 環境問題を背景にした世界観を想像力において, リアリティーのある風景やクリティカルな世界を創造しようとする展開は, 人間の本質と向き合わなければ生命の本質は見えてはこないという指摘とも共通する。また, コラボレーションに見られる感覚の共有や, コミュニケーションにおける媒体としての造形芸術の解釈は, 環境との関係性において社会的な創造を広げようとしている。そこに展開する芸術活動は, 共有

する文化的領域を社会において拡大させていく。このような展開は社会的創造活動それ自体を芸術活動と見ようとする芸術観へと展開している。

以上の前研究を基に、本稿では、下記の6ステージを仮説として設定し、生命主義的自然観を軸として展開する造形芸術の内容を実践事例から位置づけていった。

<自然環境との関係に見られる造形芸術の内容>

- A: 環境との一体化
- B: 個の想像的世界のリアリティー化
- C: 環境の芸術化
- D: 生活の芸術化
- E: 社会的リアリティー化
- F: 社会的創造活動の芸術化

生命主義的自然観を具体化する芸術の働き

さらに、その教育を具体的にしていく中で造形芸術の役割を支え補強する理論として、デューイの経験論に着目した。そこでは、その教育の核に芸術という直接的、包括的、想像的、美的な経験を位置づけることによって生成される見方や感じ方の深まりは自然観を構築させ、知がその過程で統合されていくことを考察した。その働きは下記のとおりである。

<自然環境との関係に見られる造形芸術の働き>

- ・ 事物との関係を活性化する直接的機能
- ・ 自然との統一状況を生成する包括的機能
- ・ 環境との共有を創造するコミュニケーションの道具的、完結的機能
- ・ コンテキストと表現を結び付ける統合的機能
- ・ 表現活動の美的経験の過程に見られる思考的機能
- ・ 相互作用において意味を生成する想像的機能

(2)表現内容の位置づけ

環境との一体化

事物との身体を通した直接的な作用の中で外界との一体感を知覚しながら自然観・生命観を生成していく段階である。

共通感覚論を根拠にした幼児の絵画表現の事例では、絵具と身体との関係において「描く行為」から考察した。園庭に絵具と紙を用意すると、子どもの行為は、「指に絵具をつける」、「身体に絵具をつける」という行為をきっかけに、紙や身の周りのものへと広がっていった。視覚で捉えた絵具が触覚でも捉えられることによって、身体に描いたり、手や足や身体そのもので紙にスタンプしたり、他人の身体に絵具を塗ったりと、子どもの身体は道具となり、表現媒体となり、支持体となっていく。ここに見られる自分の身体に自分が絵具を塗るという内と外が造形行為において融合する事例は、泥遊びの事例においても見られた。子どもは、造形行為を

おし環境と一体化した状況を生み出す中で自分の存在を鮮明にしている。その過程において、造形行為は、環境と子ども、外と内の両場をつなぐ包括的、統合的機能として役割を担っている。

このように身体をとおして生まれる行為の過程を見てみると、初期の段階では、身体によって外界を確認しようとする行為が表われ、次に事物との関係において造形行為が表われるが、特に、自然物との関わりは有効であることが考えられる。それらの事例では、多様な感触や造形要素との出会いの豊かさを保障する自然物は、自発的で原初的な造形行為を生み出している。

個の想像的世界のリアリティー化

事物との直接的な関わりから造形行為が発生し、次第にイメージが生成されていく。

砂場の事例では、穴を掘る、砂を積むという行為から、やがて湖や山や道ができ街が出来上がっていく。しかし、子どもたちは砂場に来ると直ぐにイメージを形に表わそうとするのではなく、砂に手を入れたり穴を掘ったりと砂と戯れ、その過程を経て、イメージを伴う造形行為へと発展する。

描く行為においてもその内容は同様に展開した。そこで見られた内容を大別すると、「命を持つそのものの形が共感的に描かれている」「自然と自分の関わりが物語的に描かれている」「自然と自分が一体化した風景として描かれている」という特徴が見られる。その内容は、まず自然と人間との関係が共感的に表現されている。命のあるものと自分を結びつけ具体的な意味づけで描写しながら、命のあるものと自分の存在を共感的に表現しようとしているところが共通している。次に、象徴的に生命を形で表現するばかりでなく、表現主義の絵画に見られるような自発的で自動的で即効的な生命力を伴う表現を幼児の線に見ることができる。

これらの表現内容に共通するところは、個人の中に生成される自然へのイメージや風景を個人の想像的世界として形象化する内容である。そしてそれらの表現内容の背景に共通しているものは生活とのつながりである。

これらの実践では、生活を基盤にしながら子どもたちは個々の物語を生成し、生活と表現は結合し表現は学びのプロセスとして理解され展開している。

環境の芸術化

事物との直接的な関係から生まれる造形は、さらに周りの環境を巻き込みその環境そのものが芸術となり、その造形作品が環境となっていく。このような環境世界の同一化に見られる展開は、芸術と自然環境との関わりを深め、包括的な関係をつくりだしコスモロジーへの回帰を生み出していく。この過程において、芸術は自然環境との共有を創造し、環境との統一で包括的な状況を生成している。これらの事例に共通するところは、環

境と作品の関係が、境界の無い融合しつな
がった包括的な世界で捉えられている点に
ある。

生活の芸術化

環境の芸術化は、さらに、衣食住を含む
生命活動全体の中で生活と芸術の同一化を
生み出していく。

3日間、1軒の古民家を拠点に非日常な
山中で宿泊をし、衣食住を共にしながら
生活をつくりだしていくというアート
キャンプの事例では、子どもたちが自
発的に環境と関わることのできる時間
と場所を保障することによって、子
どもたちは川や森の中で遊び、その
場所に造形物をつくりだし、居場所
をつくるように隠れ家をつくり、その
場所を自然物で飾っていった。そこ
では、その空間や時間も、生活の過
程そのものが芸術と捉えられる。

上の事例は、自然との関係の中で衣食
住をとおり、いのちへの見方や感じ
方を深めようとした事例でもある。こ
のような生命活動と芸術の同一化は
、この事例のように非日常な生活の中
での試みだけでなく、普段の園や学
校生活の中でも見ることができる。例
えば、身の周りの草花で草木染めをし
、足元にある土を使い陶芸で生活器を
つくり、近くの自然で拾った自然物
でランプシェードをつくり、育てた
稲の藁でリースをつくり、子どもた
ちの過ごす教室や保育室を生活空間
と捉えていくことによってその可能
性は広がる。

社会的リアリティー化

子どもたちが背景にある社会的な事
実をリアルに認識したとき、その風景
(イメージ)は想像力によって新たな
風景(イメージ)を生み出し、非現実
的現実な世界や、メッセージとしての
表現、クリティカルな表現へと展開
する。

東京都心の小学生の事例では、描か
れている風景は子どもたちが暮らす
街を対象にしているが、その内容は
想像力によって未来の温暖化の都市
の姿がクリティカルに描かれている。
これらの事例に見るように社会のリア
リティーを捉えていくものは想像力
であり、現実の世界を直視し、現実
を超えた世界を思考できるリアリ
ズムが求められる。

プラハ市の事例では、第二次世界大
戦中使用されたナチスの収容所の一
室に、今の子どもたちが「いのちの
イメージ」を描いた作品を置き、そ
の映像をネット配信し、制作した日
本とチェコの子供たちがその映像を
鑑賞したものである。過去の歴史を
直視し、子どもたちは過去と現在を
造形においてつなげていった。また
、木曾三川の千本松原での実践では
、その美しい風景の木々の下には
歴史の犠牲者となった方々の遺体が
埋められている事実を子どもたちは
社会科で学び、そして図画工作科に
おいて表現していった。これらの実
践では、子どもたちはリアリティー
を基に過去と現代をつなぎながら
想像の世界を生み出している。

社会的創造活動の芸術化

学校や国境の枠を超えて社会を創造
しようとする営みが展開している。こ
のような社会的創造活動そのものを
芸術活動と捉えようとするヨゼフ・
ボイス(Joseph Beuys)の芸術概念
が、芸術教育の可能性を広げる。こ
の考えは、の生活そのものを芸術と
捉えようとする教育活動にも共通す
る。また、の事例では、いのち観を
主題に、国境を超えて子どもたちの
絵画が行き来し、「終わりのない絵」
として絵がつながり続けている。こ
のようなコラボレーションの実践では
、共同体が造形をとおりして文化的
領域を拡張させ、いのち観の共有
と創造を繰り返していく。

(3)まとめ

6ステージの内容は、必ずしも順序立
たものではなく重なり合っている。事
物との直接的な関係に始まる行為は
外界との融合を生み出し、環境の藝
術化によって環境全体は包括され、
芸術の生活化によって芸術活動と生
活は一体化されていく。また、個の
想像の世界は、環境との関わりにお
いて包括的な一体感や共感を生み出
し、生活を基盤に個の内に物語を生
成し、いのち観が状況や関係性や社
会的なリアリティーとの関わりにお
いて生成されていく。そして創造的
社会活動という芸術の概念が共同
体を拡張させ教育の可能性を広げて
いる。それらの過程において芸術は
直接的、包括的、統合的、想像的な
機能として作用することが考えられ
る。その芸術の働きと表現内容との
関係についての検証は今後の課題と
したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携
研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

- (1). 磯部錦司, 「生命主義的自然観を基軸とした造形芸術による教育 表現内容の位置づけ」, 『美術教育学研究』, 査読あり, 第48号, 大学美術教育学会, 2016年, pp.57-64.
- (2). 磯部錦司, 森文乃「プロジェクト・アプローチの背景とその表現考 アートによる意味生成のプロセス "自然/生命":事例 Globe Wilkins Preschool -」, 『椋山女学園大学教育学部紀要』, 査読なし, Vol.8, 2015年, pp.25-46.
- (3). 山崎真里, 磯部錦司, 「自然観と生命表現の変容 事例分析1(栽培体験) -」, 『椋山女学園大学教育学部紀要』, 査読なし, Vol.7, 2014年, pp.19 - 30.
- (4). 磯部錦司, 山崎真里, 「自然観と生命表現の変容 事例分析2(アートキャンプ) -」, 『椋山女学園大学教育学部紀要』, 査読なし, Vol.7, 2014年, pp.31 - 44.

[図書](計 3件)

- (1). 磯部錦司, 福田泰雅 『保育のなかのアート プロジェクト・アプローチの実践から

- 』, 小学館, 2015 年, 全 160 頁。
- (2).磯部錦司編著, 郡司明子, 島田由紀子, 丁子かおる, 辻政博, 辻泰秀, 他 6 名 1 番目, 『造形表現・図画工作』, 建帛社, 2014 年, 全 254 頁, 本人担当分担 pp.2-4, 62-74, 78,80,82,84,86-87,94,131,133,156-158, 170,174-175.
- (3).新・幼児と保育編集部編著, 磯部錦司, 清水洋美, 神崎のりこ, 江頭恵子, 野口久美子, 木村里恵子, 佐藤暢子, 『子どもとアート - 生活から生まれる新しい造形活動 - 』, 小学館, 2013 年, 全 66 頁, 本人担当分担: pp.4-5, pp.7-17, pp.64-65.

6. 研究組織

(1)研究代表者

磯部錦司 (Isobe Kinji)

椋山女学園大学・教育学部・教授

研究者番号: 40322614